

タイトル	韓国の景観：予備的考察
著者	水野，邦彦；MIZUNO, Kunihiro
引用	季刊北海学園大学経済論集，64(1)：31-37
発行日	2016-06-30

《研究ノート》

韓国の景観

— 予備的考察 —

水 野 邦 彦

はじめに

人々の眼を自己の生活や社会に向ける契機は多様でありうるが、みずからの生活空間の物理的劣悪化はその大きな契機となるだろう。20 世紀後半に生活空間劣悪化の一因をなしてきたのは環境をめぐる諸現象である。それら諸現象は人々の社会意識を喚起する環境問題として知られるにいたった。

環境問題は一般に、第 1 段階の公害問題、第 2 段階の地球環境問題をへて、生命や人間そのものの危機に駆られた環境問題の内面化・反省化・哲学思想化という第 3 段階に向かうといわれる¹⁾。韓国でも環境にかんする意識はこのような経緯をたどってきた。

韓国で散発的な公害が起こったのは 1960 年代のことで、釜山の火力発電所から排出される煤煙被害、蔚山工業団地附近での大気汚染被害、麗川工業団地廃油による漁業被害が発生した。1970 年以降は潭陽の水銀中毒、温山工業団地での温山病（温山イタイイタイ病）、牙山干拓による魚介類の大量死や河川汚染などがたてつづけに起こり、1989 年にはソウルで水道水の重金属汚染が表面化して、環境汚染がけっして他人事ではなく自分の問題

であることを多くの市民に実感させた。こうして公害反対運動・抗議運動が高まり、みずからをとりまく環境に人々が目を向けはじめるとともに、環境保全ないし環境保護の意識が浸透しはじめる。いわば自己をとりかこむ社会的危機として環境が人々の眼前にあらわれたのであり、この社会的危機が環境問題と称される²⁾。

韓国は日本以上に短期間に高度経済成長をとげたが、そのぶん環境問題の段階も短期間に進行し、1990 年代には第 2 段階の地球規模の環境問題、第 3 段階の自然や生命が意識されはじめた。環境がたんに生活空間の物理的条件にとどまるものでなく、人間をとりまく自然や人間とは切りはなされて抽象的にとらえられる自然そのものを指すようになるのも、このような段階の進行にともなうものであろうし、抽象化された自然をいまいちど人間の生活空間にひきつけて考察する思想があらわれるのもやはり第 3 段階に入って際立つ現象である。そして 2000 年代に入ると風土や〈景観〉を主題として取り組む研究があらわれた。これには段義孚（Yi-Fu Tuan）やエドワード・レルフ（Edward Relph）らの人文主義的地理学ないし現象学的地理学の影響も考えられる。

韓国の景観はあるていど日本の景観と共通

* 印は日本で発行された書籍。それ以外は韓国ないしドイツで発行された書籍。

1) * 尾関周二編『環境哲学の探求』大月書店、1996 年、9 頁をみよ。

2) * 拙著『抵抗の韓国社会思想』青木書店、2010 年、101-103 頁をみよ。

性があり、景観にたいする韓国の人々の感覚と日本の人々の感覚には相通ずるところがある。ここでは韓国の題材を取りあげ、人間にとっての〈景観〉の意義をさぐる糸口をみいだしたい。

I. 景観における主体と客体

自然なり自然環境なりの言葉はすっかり定著しているが、抽象的に語られる自然ではなく、ごくふつうの人間がじかに接する自然をどのようなものとして捉えればよいのか。人間は自然のなかでどのようなありかたをしているのか。あるいは、山林生態学者の権ジノの言葉を借りれば、自然のどこに人間は立っているのであろうか。これは自然と人間とのかかわりかたにかんする問いであるといってもよいだろう。

一般に環境とは「私たちが暮らす世の中になにかをあたえる物質的諸要素」を指すと権ジノはいう。環境には「自然環境」と「文化的環境ないし人間をつくる環境」とがあり、自然環境が人間の生の様式に影響し、人間の生の様式が自然環境に影響する。この相互関係の産物として、文化的環境ないし人間をつくる環境が形成され、これらの全体が含蓄的にあらわれたものが景観 landscape にほかならない³⁾。

景観はそれゆえたんに客観的な存在ではなく、主観的な人間の意識とあいまって、はじめて成り立つ。みえる対象である「景」と、みる主体である「観」とが結合してできるのが景観であり、景観とは、美しい景地とそれを見る人との相互作用のうちに成立する概念であると造景学者の申相燮はいう⁴⁾。みる主

体「観」が景観を構成し、みられる客体「景」が景観の要素をなすかぎり、「観」が影響をあたえる主体であり「景」が影響を受ける客体であるとみられるが、しかしこの主体－客体関係は固定したものでなく、変わりうる。地域共同体の環境特性がそこに暮らす人々の認識にくりかえし作用をおよぼし、その作用を受けた認識を人々の記憶にしみこませ、この認識が人々の景観にたいする価値基準となる⁵⁾。

たとえば竹林は韓国の主として南部地方に分布し、村の近くにあることが多いので、南部地方で生まれた人々は暮らしのなかで竹の知識を得て成長する。これにたいし北部地方で生まれ竹林に接したことがない人々は、竹について漠然とした感じをいだいたり竹を異質な自然環境要素と受けとめたりし、竹にかんして恵みというより否定的に歪曲された自然観を生みうる。生まれ育った地域のちがいにより、竹をめぐる、経験的に得た知識にもとづいて親環境の関係に発展することもある。経験がないことによって歪曲された自然観として定著することもある。こうして形成され定著した自然観が多くの人々によって地域の見方として表出されると、その自然観は地域の「文化」に反映する。表出された自然観は地域社会の自然環境はもちろん「人間的影響下の環境」にも肯定的であれ否定的であれ影響をおよぼし、竹林が消え去ったり維持発展されたりする地域環境の特性として定著する⁶⁾。

主体は客体をとらえて評価するが、この主

3) 権ジノ「韓国の原型的景観と山」李道元ほか編『韓国の伝統生態学 2』サイエンスブックス、2008年、53頁をみよ。

4) 申相燮『韓国の伝統的な村と文化景観をもとめて』大家、2007年、12頁をみよ。

5) 権ジノ「韓国の原型的景観と山」55-56頁をみよ。これは、景観には客体である「景」(場面)と主体である「観」(視線)との区別と結合が示されているというベルクの分析と重なるものといえる。オギュスタン・ベルク『風土の日本』筑摩書房、1992年、196頁をみよ。

6) 権ジノ「韓国の原型的景観と山」56-58頁をみよ。

体の認識能力・評価能力は、主体をとりまく客体のなかで形成され陶冶される。主体が客体をとらえて評価するかぎり主体が客体にたいして優位に立つが、客体が主体を形成し陶冶するかぎり客体が主体にたいして優位に立つ。主体と客体とのこのような相互作用は、主観的意識と客観的存在との相互作用、人間と社会との相互作用とも受けとめうる。

このことは感覚の主体と感覚の対象との関係としてマルクスが論じている。一方では「どれほど美しい音楽であっても非音楽的な耳にはなんの意味もなく、それは〔音楽としての〕対象にさえならない。……私にとってある対象の意味（対象にふさわしい感覚にとってのみ意味がある）は、私の感覚がおよぶところまでしか広がらない」として、主観の能力があつてこそ音楽の対象が意味をなすこと、主観が音楽的对象にたいして優位をなすことが述べられる。他方でマルクスは「音楽がはじめて人間の音楽的感覚をよびおこす」こと、「五感の形成は今日までの全世界史の仕事の成果である」ことを洞察し、人間の意識や感覚という主観はア・プリオリに成立するのではなく社会的存在や歴史的蓄積のなかで形成されるものであることを示す⁷⁾。いうなれば感覚の主体と対象、主体と客体とは、相互作用をなすのである。この相互作用は「藝術作品が……藝術的感覚があつて美を享受しうる公衆をつくるのだ」⁸⁾という一句に凝縮されている。つまりこの句には、「藝術的感覚があつて美を享受しうる公衆」との文言のもとに藝術的感覚を有する人々が美をとらえる作用が示されるとともに、「藝術作品が……公衆をつくる」との文言のもとに藝

術作品という客観的存在が感覚をそなえた主観を形成する作用が示されており、人間と社会とのあいだに双方向のはたらきかけがなされることが示唆されているのである。

マルクスのいう人間と社会との相互作用は、人間と自然との相互作用と重なりあう。これらはいわば、人間と人間をとりまく自然的社会的環境とのあいだの相互作用としてとらえられる。景観はまさしく人間をとりまく自然的社会的環境の一形態にほかならない。

II. 伝統的村落の景観

景観は具体的に韓国でどのように表象されるのだろうか。これには大別してふたつの柱がみられる。ひとつは伝統的と称される村落の景観であり、いまひとつは近代的都市景観である。

韓国を代表する生態学者の李道元は大著『景観生態学』にくわえて『韓国の古き景観における生態の知恵』『伝統村落景観要素の生態的意味』、さらに自身が編輯した『韓国の伝統生態学』などの著作において、伝統的村落の典型的景観を詳論している。

学術的用語としての景観は、目にみえる姿というより、生態系の束が数キロメートルにわたってくりかえされるモザイク様の空間である。生態系の束はエネルギーと物質、情報交換によって結びついた空間的要素をしめすものである。空間的位階としてみれば、束は生態系と景観とのあいだに置かれた単位である。村、農耕地域、山林、河川などは、景観の束の主要構成要素としてひとつの〈つくり〉をなしている。〈つくり〉configurationとは、空間的に区分があきらかな種々の生態系が特徴的な排列をなし、景観のなかでくりかえしあらわれる単位を意味する。韓国の伝統的村落は山のゆるやかな傾斜面につくられ「背山臨水」の地形をなしている。そこでは南向きないし南東向きのゆるやかな斜面を居

7) Vgl. Karl Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, MEW, Ergänzungsband I, Berlin, 1968, S. 541f.

8) Karl Marx, Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie, MEW, Bd. 13, S. 624.

住地とし、裏庭は山まで伸び、前方の耕作地に川が流れる。山のほうには森が、そこから降りてくるにつれて墓や塚が、緩傾斜地には果樹・桑畑・共用の雑木林が、山と平野とが接する末端部分には居住地ができ、村が形成される。村では豊富な地下水や良好な日照が得られ、自然災害の防衛避難や燃料採取の手段も用意される⁹⁾。

東アジアには理想的住居環境をつくりあげるために自然を補完する地理思想と文化的伝統がある。そのなかで、景観という目で韓国の伝統的な田舎の風景をみわたすとすれば、裏山・村落・農耕地という造作として成り立つひとつの束を認識しうる¹⁰⁾。

韓国の住居景観にみいだしうるもっとも際立った特性のひとつは、その立地がなんらかの構造物によって取り囲まれている姿である。農業と住居が成り立つ韓国の生活空間は、その大部分が森もしくは低い丘からなる山地によって囲まれている。山岳地帯からなる韓国の地形においては、土と水が得られやすい地の選定が不可避であったといえる。これと関連して重要なのは、人工的な景観の〈つくり〉が、ただ自然条件に受動的にしたがったわけではなく、人々によって能動的に造成されたことである¹¹⁾。

Ⅲ. 近代的な都市景観

他方、近代的都市景観にかんする研究とし

て、李揆穆『韓国の都市景観』のように都市に焦点を絞った本格的研究のほか、曹正松ほか『現代景観をみる 12 の視線』所収の都市景観論考などが上梓されている。

『現代景観をみる 12 の視線』には文スヨン「都市生態系復元と景観構成」と朴ヨンジョン「オープンスペースとしての広場」とが収録されているが、このうち文スヨン論文の主眼は都市生態系ないし都市生態環境の復元にあり、ドイツ・英国およびソウル清溪川の事例によせて復元の景観的意味をさぐるさいにも論述の力点は復元に置かれている。そこでは都市景観はおおむね「索莫とした都市空間のなかで人々が休息し思い出をつくることができる空間」、かつては「自然をもとめて都市の外に出かけていた人々」や遠くまで出かけられない子どもや老弱者に自然をみる機会を提供する空間、ととらえられている¹²⁾。このかぎり都市景観には自然の代用という位置づけがあたえられるであろう。朴ヨンジョン論文では、西欧の歴史における広場や伝統的韓国の広場の形態や意味が論じられ、広場は「相対的に閉鎖的な空間で、圍繞空間の領域性と疎通という場所性」を有するとされる。「摩天楼で満たされた韓国の都市に通気口をつくるのは公園や広場のような空いた空間のオープンスペースなのだ」という朴ヨンジョンは、広場が疎通（communication）の空間であり、都市の活動と要素によって都市にいつそう多様な表情をあたえる空間であるとみなす。広場は物理的疎通の空間、社会的疎通の空間として位置づけられる¹³⁾。文スヨンも朴ヨンジョンもともに景観そのものの有す

9) 李道元編『韓国の伝統生態学』28-30 頁／李道元『伝統村落景観要素の生態的意味』ソウル大学校出版部、2004 年、11-13 頁／李道元『韓国の古き景観における生態の知恵』ソウル大学校出版部、2003 年、37-38 頁／李道元『景観生態学』ソウル大学校出版部、2001 年、270-271 頁をみよ。

10) 李道元『韓国の古き景観における生態の知恵』69、81 頁をみよ。

11) 李道元『伝統村落景観要素の生態的意味』78-79 頁をみよ。

12) 文スヨン「都市生態系復元と景観構成」曹正松ほか『現代景観をみる 12 の視線』韓国学術情報、2006 年、81-105 頁をみよ。

13) 朴ヨンジョン「オープンスペースとしての広場」曹正松ほか『現代景観をみる 12 の視線』109-127 頁をみよ。

る固有の意義や人間的意味というより、生態系復元とかかわる自然の代用としての都市景観、都市でのコミュニケーションの場としての広場が、主題として論じられるといえる。

景観そのものの有する固有の意義や人間的意味をみきわめる点についていえば、より示唆的なのは李揆穆『韓国の都市景観』である。この著作において景観もしくは都市景観は、つぎのようにとらえられている。景観はつね日ごろ私たちがみるものであり、私たちの周辺環境がみせる風景や都市の姿である。景観は、実物・客観的実在としての環境というより、私たちに「みえる」かざりでの環境、私たちが表象するイメージとしての環境であり、みる人の解釈によって変わりうるものである。私たちがどこにしようとして景観は私たちをとりまいており、私たちにせまってくる。環境として目に入ってくるのは物理的形態であるとしても、そこには人間の文化がこめられている。都市景観は私たちがつねに接している日常的景観類型であり、そこでは都市の施設と活動が主役をなす。というのは、都市をじかに構成する建築物と屋外空間、森や水のごとき自然物など、視覚的にみえる都市の風景が主体になるのはもちろん、都市内のもろもろの活動や市民生活、独特な雰囲気、イメージなど、視覚的に感知されない領域もここにふくまれるからである。それはたんに美的側面でみえる都市環境のみならず、生活がこめられた都市全体の総合的で個性的な表現であり、この面でその都市の文化をあらわすものである。私たちは都市景観をとおして都市の社会と文化を理解しうるのであり、都市景観の分析によってもろもろの社会文化的現象が把握される¹⁴⁾。このような景観のとらえかたは申相燮にも共通してみられ、歴史・文化・生活様式などが空間にしみこんだ結果としての文

化的価値・規範・土地にたいする態度が景観に反映されていることが論じられている¹⁵⁾。

IV. 固有のものの取り戻し

韓国の都市景観について李揆穆はつぎのようにしるす。韓国の街には残念ながら、西洋の古い街のように石と煉瓦でつくられた家々が並んでいるわけでもなく、緑ゆたかな公園があるわけでもない。けれども、しゃれた建物はないものの山があり、広場の代わりに道がある。歴史と説話があり、伝統的要素と固有の生活様式がある。韓国の都市景観のなかに隠れていて、目にみえない諸要素を探し求める方法を模索すべきである¹⁶⁾。

この発想は容易に理解できる。異文化の経験を機に自文化に目を向けること、異文化のなかに身を置いて自己の根幹やアイデンティティをふりかえることは、きわめて自然なことであろう。ところが韓国には、それらの自然ないとなみを遮る制約が加えられていた。

現代韓国の基盤を形成する朝鮮近代化は、他国の力によって他律的に推進された。したがって、近代化過程にある朝鮮の人々が異文化を経験するさいも、みずからの意志によってそれを経験するのではなく、他国の意志をとおして経験せざるをえなかった。それにともない、近代化過程にある朝鮮で自文化に目を向けることは大きく制約されていたとみなすべきである。このことを李揆穆はつぎのようにしるしている。

……朝鮮時代に形成された原型景観は、19世紀末の開港期以降いわゆる近代化過程をへて変貌をはじめ、不幸なことにこの重要な時期に日本の侵掠と強占に

14) 李揆穆『韓国の都市景観』悦話堂、2002年、123-124頁をみよ。

15) 申相燮『韓国の伝統的な村と文化景観をもとめて』16頁をみよ。

16) 李揆穆『韓国の都市景観』137-138頁をみよ。

よって「日本をとおして」近代的景観の姿へと落ちつくことになった。これは開港後のいわゆる国際主義様式から最近のポストモダニズムにいたるまで、米国をはじめ西欧や日本の一方的影響を受けつつ、今日の都市の姿をととのえることになった。うわべには、このように外国文化が深く位置づき、私たち固有のものがなくなったようにみえるが、私たちの固有なものはそれが生活様式であれ伝統的空間であれ、依然として都市の奥深いところにそれぞれ位置づいている。現在ではあまり読みとられていないが、みえざる都市のなかのどこかに私たちが探し出さねばならない特徴的都市景観の要素、韓国的景観として打ち出さねばならない要素が、たしかにあると思う¹⁷⁾。

韓国の「固有のもの」「伝統的空間」という言葉には、外部の力によって近代化させられた人々がみずからの〈ありか〉を探し求めようとする指向性、みずからの存在を確信し実感しようとする指向性があらわれているであろう。外部の力によって近代化させられたことは、それがみずからの意志によって果たされた近代化でなかったこと、歪んだ近代化でしかなかったことを意味する。歪んだ近代化を余儀なくされ、「固有のもの」「伝統的空間」の価値が外なる力によって貶められた韓国のほうが、日本以上に伝統的で固有のものを強く欲しており「韓国的景観」の再定位ないし取り戻しを渴望しているとしても無理はない。

こうして都市景観といえども、世界各地に共通する「普遍的」な都市はありえず、かならずその地に固有の背景をもって成り立っている。欧米ふうのしゃれた都市景観に追従す

るのでなく、韓国であれば韓国に固有の景観を積極的に打ち出してゆくことが求められている。

固有の景観は、その地の自然風土のなかで形成されたものであり、その地の人々の生活のなかで形成されたものである。手つかずの自然はべつとして、その地の人々の生活のなかで形成されたものは、その地の物質的要素と、その諸要素を組み合わせる人々の感覚や嗜好、つまり意識的要素とを注ぎこむことによって成り立った場である。こうして景観は、もともとの自然風土、もしくは景観を構成する物質的要素と、それを組み合わせて形づくる意識的要素とからなる。ここでいう意識は、景観を構成する意識、生活のなかで陶冶され生活のなかで発揮される意識であり、生活感覚に近い。韓国固有の景観には、物質的にも精神的にも、韓国固有の生活誌や生活感覚がしみこんでいるのである。

ここで想起されるのが、日本で名著の誉れ高い芦原義信『街並みの美学』である。1979年に上梓された同書で著者は「街並みは、そこに住みついた人々が、その歴史のなかでつくりあげてきたものであり、そのつくられかたは風土と人間とのかかわりあいにおいて成立するものである。であるから、この地球上に現存する街並みは、その人間存在の時間的空間的な自己了解のしかたと深くかかわりあっているものである。」¹⁸⁾とし、本稿の考察もこれに共鳴するものである。ただ同書ではこの叙述につづけて「そうかといって、折角この日本に生れ、都市生活を余儀なくされている大部分の日本人にとって、少しでも快い住いの環境や美しい街並みを創り出すことは急務である」と、また「われわれ日本人は、街をより住みやすく美しくしようという

17) 李揆穆『韓国の都市景観』138頁。

18) * 芦原義信『街並みの美学』岩波書店、1979年、247頁。

考えはもっていないのであろうか。また、われわれは美しい街並みをつくるのに不向きなのであろうか」と書かれ¹⁹⁾、美しい街並みが目指されるべきことが論じられる。そして、同書でくりかえし西欧の街並みが範型のように示されるところから窺えるように、著者が念頭に置く美しい景観の基本は西欧の歴史的街並みであり、大筋において著者は日本の街並みを憂い西欧の街並みに憧れているようにみえる。「都市景観の理論は各論者が、その理論がうまく適用される都市を対象に研究することによって成り立ったものではないか」²⁰⁾という李揆穆の洞察にもとづいていえば、芦原義信の「街並み」研究は西欧指向性を骨格として成り立っているのかもしれない。

韓国都市景観探究の趨勢は、このような西欧を基準にする景観でなく、また抽象的で無国籍的な景観でもなく、韓国の景観・韓国固有の景観である。それは、長きにわたって韓国の人々の基盤となってきた生活誌と生活感覚とを探し求めるいとなみでもあり、長きにわたって韓国の人々が生みだしてきた生活誌と生活感覚とを探し求めるいとなみでもある。

おわりに

韓国の人々が生みだしてきたと同時に韓国の人々の基盤となってきた生活誌と生活感覚とを探し求めることは、韓国の人々がみずからの姿を探し求めること、みずからの場、〈ありか〉を探し求めることである。それは、みずからの存在を実感し確証するための探求といえる。

自然的物理的な環境と空間は、人間の活動がおこなわれ人間的意味が附与されて初めて〈場所〉placeになる。この〈場所〉の「物理的で視覚的な形態」が景観にほかならな

い²¹⁾。いわば人間の生活誌と生活感覚とが物理的視覚的にあらわれたものが景観なのである。したがって、韓国にみられる伝統的景観・近代的景観やその〈つくり〉を分析することには、韓国の人々の生活誌と生活感覚、韓国の人々の姿を把握するという意味がある。

他方で、本稿では取りあげられなかったが、人がみずから慣れ親しんできた景観を好むとともに、その人がいままで経験したことのない景観に関心をいざくことが考えられる。みずから慣れ親しんできた景観は郷愁を誘い、半生の回顧や自己確認、自我再定立の契機となり、それはやがて自己肯定的回顧につながるであろう。いままで経験したことのない景観は憧憬を誘うが、それは主として異国情緒にたいする憧憬、すなわちみずからが手に入っていないものにたいする憧憬である。これは韓国や日本においてじっさいには西洋古典文化をはじめとする西洋的なものにたいする憧憬であることが多く、さきの芦原義信の「街並み」研究などは、その日本における好例といえる。

こうして景観には、人間がみずからの来し方を肯定的に確証し、みずからの〈ありか〉を再定立するための「物理的で視覚的な」よりどころになるという意義と、みずからの居住圏とはかけはなれており多分に非現実性を前提して表象される憧れの眺望という意義とが内包されているといえるであろう。そしてこれらの意義はイデオロギー的性格を帯びている。みずからの〈ありか〉を肯定的に再定立するよりどころであることは、自己肯定的・保身的・守旧的観念や伝統主義的観念を構造化する一環をなしうるし、非現実的な眺望を憧憬することは日本の脱亜入欧に象徴される西洋中心主義的先入観の産物でもありうるが、この点の詳細は別稿を要する。

19) * 芦原義信『街並みの美学』247, 259 頁。

20) 李揆穆『韓国の都市景観』137 頁。

21) 韓ソンミ「学問的連鎖と文学でみる景観」曹正松ほか『現代景観をみる 12 の視線』45 頁をみよ。